甲府中学校・甲府第一高等学校

我ら、同級生

甲府第一高等学校創立130周年記念誌別冊

我ら、同級生

まえがき

熱心な同窓会活動をされている多くの先輩・中堅学年から原稿・写真がたくさん集まり、予定よりページ数が増えた。また、内容面で最近の母校の歩みを中心とする記事と先輩の皆さまの近況方向を同一の冊子に集約するのはやや統一性・整合性を欠くという点から編集会議の中で指摘された。報告には、旧制中学時代の学校生活、戦争体験、勤労学徒の動員生活、新制高校や男女共学になったころの一高、個性的な同級生や恩師、強行遠足、クラブ活動、甲子園出場、80 周年・100 周年、40 年振りの修学旅行、当番学年の苦心談、学年の組織づくりの哀歓など実に多様な体験と懐旧談が綴られている。報告内容それ自体が母校の歴史の時々の姿を知る貴重な証言集であり、若い後輩諸君にとっては同窓会活動の好適な手引書でもあることから、編集委員会は、特集として独立した小冊子になり得ると考えた。

委員会は、以上の理由から協賛委員会役員会の承認を得て、記念誌を２部構成で発行することにした。

甲府中学・甲府一高
創立 130 周年記念誌編集委員会

昭和12年卒業同級会

昭和12年卒：山梨県立甲府中学校昭和12年卒業同級会
平成22年4月21日　於：談露館

私達は昭和7年4月、県下の小学校より誇りをもって、山梨県立甲府中学校に入校した200名が同級生だった。そして5年、昭和12年3月、169名が卒業した。それぞれが個性と才能を持ち、将来を嘱望されていた。だが、昭和12年といえば、日中戦争は全面戦争に拡がり、16年には太平洋戦争がはじまり、同級生のほとんどが戦争に参加し、多くの仲間、約50名を失った。

生き残った仲間は、食べる物にもことかきながら、家族を守り、日本復興のために主要な地位で働き、今の日本をきずいたと、心ひそかに確信している。

それだけに仲間の結束は固く、戦後すぐに同級会を結成し、毎年県内はじめ全国より集い、楽しく語り合っている。母校への思いも強く、記念の募金には、いつも目標額を達成している。

同級会は結成以来正月に開かれていたが、年をとり、最近は4月20日近くの仏滅の日（理由はホテルが空いているから）談露館に集ることになっている。

皆90才を越えた。昨年9名、今年（22年）8名となったが、5名になっても中止するなと意気高い同級会である。

神宮寺 敬

げに我々は戦いの子
昭和17年卒業同級会

昭和17年卒：喜多会　平成22年5月8日　於：湯村温泉郷 常磐ホテル

私共昭和17年甲中卒業生の大半は大正13―14年の生まれ、昭和6年小学校に入学した年に満州事変、昭和12年甲中入学の年に支那事変、甲中5年卒業を目前に大東亜戦争が勃発しました。卒業式に増村保造君（元大映映画監督、故人）が答辞でその事に触れ「我々は正に戦いの子である」と述べた言葉が強烈な印象として70年たった今も胸に焼きついております。

入学時204名が卒業の際は163名、之は上から落ちてきた人も多かったが、下へ落ちていった（落第）人がそれ以上に多かったせいです。

校長は大野芳麿先生、チック、キューピー、つち、ポテ、エロ坊主、じこ、お嬢さん、等等、夫々個性豊かな一家言を持った懐かしい恩師の顔ぶれが思い出されます。

現在、生存が確認されているのが60数名おりますが、体調不良その他で今年5月の同級会の出席者は13名でした。

かつての紅顔の美少年の面影は疾うに失われた85―6歳のおじい達ですが、世の中のしがらみから開放されて卒寿、白寿を目指してしぶとく生きております。

塚原 敏夫

昭和20年卒同級会「甲中二十日会」

今日、日本は「戦争を知らない世代」に支えられているが、私たちは満洲事変（4歳の時）支那事変（小学校3年）大東亜戦争（中学1年）と、まさに「戦争しか知らない世代」であった。同級生から予科練へ入隊した者30余名、そのほぼ全員が特攻隊員となり、3名が出撃し戦死。他は飛行機が無く人間魚雷に転向した。軍隊へ行かぬ者は学徒動員令により相模原陸軍造兵廠で兵器造りに従事。宿舎は一部屋6人が雑魚寝。一日18時間という過酷な労働を強いられた。毎晩の空襲には各自が掘った防空壕へ退避した。卒業は3カ月延期で6月末に解放され、8月が終戦。上級学校進学は自由となったが、東京など県外へは経済負担が重く、山梨工専へ46名が入学したように県内へ止どまる者が多く、あたかも同級会の延長であった。このように私たちの学年は、他に例の無い特異な世代であって、同級生の結束の固さも、宿命的環境がそうさせたものと言えるだろう。卒業、終戦年の昭和20年12月、私たちは毎月20日に甲府在住者同級会を開催することを申し合わせ、「甲中二十日会」と命名した。以来今日まで65年間、一度も休まず継続していることを誇りとしている。

昭和20年卒：同級会「甲中二十日会」

横須賀の追浜で寝食を共にして戦った絆 昭和20年 4年生卒業『六浦会』

私達は昭和16年、太平洋戦争開戦の年に入学した。その頃は戦時下とは言え伝統ある甲府中学として、特色ある先生方も多く校風や授業は全県から選抜された我々の矜持を満たし希望に燃えていた。戦争の拡大と共に軍事教育が強化され学業中途で軍に志願する友達を多く送った。

昭和19年7月、4年生の夏に横須賀海軍基地追浜の海軍航空技術廠に動員された。宿舎は六浦にあった。そこは我が国最大の航空研究機関で敗戦の色濃い日本の運命を必死に支えた軍人軍属の技術者集団であった。服務は当初日勤であったが敵の艦載機攻撃が激しくなり12時間労働の昼夜交替勤務となった、その中にあっても国の将来を考えてか深夜仕事の合い間に技術士官による座学もあった。

入学時の5年卒業予定が戦時非常措置により4年卒業となり20年3月末現地で卒業式が行われた、先生と担任士官が臨席し『海ゆかば』と校歌を斉唱し簡素に終った。しかし甲中生として動員は継続され沖縄戦終結の6月末に動員解除となり次の進学先に向かった。この一年間は厳しい勤務とひもじさに耐え続けた生活で、国を信じ迷いもなくひたむきに生

昭和20年卒：昭和20年　4年年卒業『六浦会』
『古希記念誌 B5210頁』『傘寿記念誌 B5170頁』

きた一時期であった。

それから65年寝食を共にした往事を偲び、毎年欠かさず甲府で6月に東京で12月に六浦会を開き苦労を共にした仲間と友情を暖めている。そして激動期を生きた証として『昭和16年入学生の記録』をしるした『古希記念誌B5210頁』『傘寿記念誌B5170頁』を刊行した。

丸茂 嘉男

戦火の彼方
甲府一高東京25会
昭和25年卒業生

昭和25年卒：甲府一高東京25会　H22.4.16　於：グランドヒル市ヶ谷

私達は昭和19年太平洋戦争の末期旧制甲府中学に入学、足にゲートルを巻いて登校、学校では配属将校に教練を習いました。校庭での教練の時間に突然空襲警報が鳴り響き私達は近くの桑畑に避難。B29の大編隊が青空に銀翼を連ね白い飛行機雲をたなびかせ北上していました。私達は怖さを忘れその美しさに見とれました。私達の入学した年の強行遠足は終点が小野でした。夜中の12時に母校を出た私達は韮崎を抜け街道の柿を失敬し台が原の七賢を過ぎ諏訪湖に達した頃は冷たい秋雨でした。草鞋は水にぬれて重く、傘も無く握飯を腰に巻いた少年達の体を容赦なく疲労と睡魔が襲いました。岡谷の次の川岸で旧制松本高校の先輩達が暖かく迎え終点迄先導してくれました。私達が学校で勉強したのはその頃迄で、終戦の8月迄は農家への勤労奉仕に明け暮れました。食糧難の終戦直後には登美の寿屋農場で春に植えたサツマイモを秋に収穫に行きました。現在、東京では三枝欣一君の下、104歳の堀内先生を迎え毎年5月にグランドヒル市ヶ谷で甲府一高25会に約50名が、甲府では伊奈宏司君の下、隔月、スコットでヤロー会に約15名が出席しています。

関 和夫

『29一高会』の
堅い絆は心だ
甲府一高
昭和29年卒業生

昭和29年卒：甲府一高S29年卒業生　古希を祝う会
平成17年5月14日　於：甲府富士屋ホテル

私達が甲府一高へ入学したのは、昭和26年でまだ戦後の復興途中だった。そんな中での3年間はいろいろの事があった。特に思い出すのは、2年の4月に行われた関西への修学旅行です。東海道本線に乗って11時間、親元を離れて初めての5日間の旅は本当に楽しかった。タバコも覚え、見る

事、する事みんな初めての事で唯々夢中で過ごしました。そこで同級生の和と言うものが出来たのだと思います。そしてもう一つは、やはり強行遠足です。その当時は松本まで100kmが目標でしたがそれを超して大町以北まで行った強者までおりました。

それから、私どもの同級生からは甲府中学・甲府一高を通して初めての甲府市長3期12年、山梨県知事1期4年を勤めた山本栄彦君がいた事も同級生の絆を強めた要因だと思います。彼が立候補した時は〝驚きと結束〟が一夜にして出来たように思いました。それは彼の人柄と同級生の心が一つになったことだと思います。それから日本原子力発電所の社長や東京電力の社長も同級生から出ました。

しかし、今年75歳になり、行動力も減退し、人生の盛りを過ぎた今、よき友人に恵まれた事に感謝・感謝の毎日です…。

武内 謙之

賛和会総会と東京賛和会総会
昭和30年卒業生

昭和30年卒：平成21年10月9日　東京賛和会総会
於：青山ダイヤモンドホール

昭和30年卒：平成22年3月20日　賛和会総会　於：古名屋ホテル

私達は山梨県立甲府第一高等学校を昭和30年に卒業した仲間です。文才のある人が、会の名称を［30会］→［賛和会］と昇華させました。「甲府一高東京同窓会」が発足した時に「東京賛和会」も発足しました。

それ以来賛和会と東京賛和会は仲良く交流しながら常に競争相手であります。今回の創立130周年の記念募金でもこの関係が上手く機能しました。

両賛和会が74才で咲かせた嬉しい＜華＞です。

「飛躍の会」
有志の2回目
思い出の修学旅行記
昭和35年卒業生

昭和35年卒：舞妓さん、芸妓さんを囲んでの記念写真
京都・鴨川「鶴清」にて（平成7年11月11日撮影）

高校2年の修学旅行から数えて40年目あたる年（平成7年）に、2回目思い出修学旅行を行いました。30名の参加者で、偶然男女15人ずつとなりました。高校の修学旅行の定番だった京都に一泊二日のバスツアーです。バスの中では朝からアルコールの匂いがプンプン。高校時代はこんな訳には参らないと言いながら、グイッと…。それはそれは、賑やかな楽しいツアーとなりました。

京都では、高校の時に行った三千院や嵯峨野などを散策、皆若かりし頃の思い出に耽っていました。夜は賑やかに懇親会。主役は写真に写っている舞妓さんです。座布団に座った彼女の姿は女性のダルマさんのようで、何とも言えない雰囲気を醸し出し、宴会を更に盛り上げてくれました。集合写真の後、舞台の上に用意された座布団に彼女が座り、その横に我々が一人ずつ次々に座ってのツーショットですが、皆福を求めて我先にと舞台に駆け上がる姿が笑いを誘い、拍手喝采となりました。

懐かしい京都を訪ねた40年ぶりの修学旅行は、高校時代の思い出とともに同級生の絆を更に深めた有意義な旅となりました。

昭和37年卒業
雄飛会・三七会

昭和37年卒：“半世紀”ぶりの再会で
昔話しになつかしさがよみがえる同級会

昭和37年卒：戦後初の甲子園出場を果した甲府一高チーム

私達は、昭和37年に卒業しました。
平成6年の第114回同窓会総会は、私達が代表幹事を務めましたが、これがきっかけで県内在住の同級生有志による親睦の会を結成、会の名称は担当した同窓会総会のテーマ〝雄飛！いま新たに〟から『雄飛会』と命名小田切常雄会長を中心に毎月例会を行い、情報交換や各種行事などを通して親睦の輪を広げております。思い出深い行事としては〝還暦の修学旅行〟でした。当時の修学旅行先は奈良、京都方面でしたが、四十数年ぶりに訪づれた地で、みんな高校時代に戻って、大いにはしゃぎ、楽しんできました。現在会員47名。一方、東京近郊に在住する同級生も『三七会』（みなの会・会員130名）を結成こちらも活発な活動を行っています。

この『三七会』では平成21年度の行事として「母校訪問バスツアー」が有志により実施、なつかしい母校の見学のあと『雄飛会』有志の合同昼食会で、旧交を温めました。

さて、私達昭和37年卒のみんなが忘れられない出来事は、何といっても野球部の甲子園出場であります。昭和36年、当時の西関東大会（山梨・埼玉）で、長田詮監督率いる我が甲府一高は、強豪埼玉勢を撃破し、決勝は初の県勢対決となり、甲府工業を下して第43回夏の甲子園出場を果たしたのであります。甲府一高としては戦前の昭和10年、甲府中学として出場して以来で、戦後初の快挙でありました。

50年経っても、この迫力 ドラマー森山に勇気をもらった 昭和38年卒業

昭和38年卒の仲間たちが、晴れて甲府一高の門をくぐった8卒生にとって創立130周年の本年は「入学50年」という勘定になる。

かねて先輩方から聞き及んでいたのは「卒業して50年も経つと、ぼちぼちと仲間がいなくなるゾ」。この1年間だけで、数人が物故、闘病生活者は数知れず、である。

だが、しかし、とんでもないバイタリティーで頑張っているヤツらだっていることはいる。そんな連中の中のひとりが、森山威男（もりやま・たけお）だ。ジャズミュージックの世界にあって〝知る人ぞ知る〟ドラム奏者だ。あえて彼一人だけ名前を挙げたのは、2年前、母校の吹奏楽部と合同セッションを聴かせてもらった折の強烈な印象からである。ドラマー森山唯一人と、半世紀後輩との数十人の対決が実現した。勝負は先輩の勝ち。ここで言うのは、技術ではなく「音のでかさ」。かつてのやんちゃな仲間が50年経ってもこの迫力。一線をリタイアしてしみったれ生活の多くの仲間は、「ムム・ム」とうなるしかなかったのダ。「おれたちもがんば らなくちゃあ」と勇気をもらった次第である。

昭和38年卒：130周年記念式典で在校生との競演をした森山威男さん

七夕デイト 昭和39年卒業

応援団OBの皆さんの気合いの入ったエールに吸い込まれ胸にこみ上げるあついものを感じながら、私も声を張り上げ、魂をふるわせながら、母校の校歌、応援歌を今年も唄う。

十何年か前、今の宮島甲府市長を先頭に、当番幹事として集まった折に、だれからともなく「年に一度の同窓会の日は七夕デイトをしよう」と提案がされました。ゴルフに加えてハイキングと、同窓会参加と合せて両日は大忙しの賑わいになります。三澤君を中心としてゴルフは、飯島君 後藤君、登山は成澤君が受持ち、大変な盛り上がりで、親交を深めている39年卒の仲間達です。

私達、年金トリオと言うんですが、（古屋佳寿子、石原ヤスと私）も「年金をもらうようになってもずっと親友だよ」と約束を交わしてからもう47年。今ではトリオが大きな輪になり、何を見ても聞いても感動し、わくわくした青春時代、甲府一高で素晴しい先生方や仲間と出会い、沢山のことを学べたことと、その頃の思い出語りに耽けり、また新しい一歩が踏み出せることは、新たな希望をよみがえす、ほんとうに幸せのこ

昭和39年卒

とであります。

母校甲府一高のますますの発展を祈りながら、又来年の「七夕デイト」を楽しみにしております。

風間 裕子

幻の修学旅行
昭和44年卒業生

昭和44年卒：京都 清涼寺にて

私たちの学年は修学旅行がなかった！

中止になった理由は定かではなく、前学年の方に聞いてみても明確な答えは得られず。まあ、理由はどうであれ、ずっと胸に秘めていた40年ぶりの〝幻の修学旅行〟は平成19年12月2日に挙行されました。

参加者は総勢52名。月日の流れは外見で一目瞭然だが、気持ちは高校生そのもの。「昨夜は興奮して眠れなかった」「おやつは何を持ってきた？」などの会話も弾む。期待に胸を膨らませて、新幹線に乗車。他の乗客の迷惑にならないようにと〝風紀委員〟が見回りするが、座席のあちらこちらで「プッシュ！」と缶を開ける音。（おっと、高校生は禁酒だけど！？）

京都到着後は自由行動。その後、宿泊地「湯の花温泉」にて車で到着した山梨組と合流。夜は全員で楽しいお食事会（大宴会！）。時は完全に40年前にタイムスリップ。そうそう、本物の舞妓さんの前で、純情な男子の鼻の下は長〜く伸びていたっけ！

翌日は団体行動で清涼寺にて記念撮影後、京都の秋を心ゆくまで満喫し、後ろ髪を惹かれる思いで帰路に着く。

40年ぶりの幻の修学旅行、彩り鮮やかな紅葉に負けないくらいの美しい思い出を胸に、私たちは今年、還暦を迎えます。

昭和47年卒業
「47会」

昭和47年卒：「47会」

女性の頑張り＋一歩遅れて男性陣＝成功の秘訣

ついに私たち47年卒業が「甲府中学・甲府一高東京同窓会」の当番学年となった。決めたテーマは「be Ambitious Again!」今　新たなる人生の扉を再び！

一年半前の去年2月、協力してくれそうな同級生20人あまりが集まったが、卒業からはじめて会う顔もあり、この時点で成功の確信はなかった。以来土曜日の午前10時から夕方4時すぎまで、集うこと二十回余り。何をそんなに議論することがあるのかと思われるかも知れないが、懇親、広告、日新鐘、IT、会計、救護など各部会の課題をひとつずつつめていった。時間はかかったが部会任せにせず幹事の情報共有化が図れた。そこで得た結論は「この一大イベントをやり遂げた先輩たちは立派だ」「目標達成に向けてパワーを発揮するのは女性だ」という2点。苦しい広告集め、最終段階での同級生へのもう一声の声かけ、いずれも一紅会講演会を成功させた女性陣の頑張りが発揮された。同窓会当日の7月10日には来賓を含め546人の方にお集まりいただき、わが47年卒も甲府を含め96人が駆けつけてくれた。幹事一同いま人生の扉を開けた状態で、心理的には虚脱状態に陥っている。

昭和49年卒「よんく会」

昭和49年3月、母校の創立100周年まで残り一桁となったあの年、私たち同級生は甲府一高を後にし、それぞれの道へと旅立ちました。そして、長い月日を経て、50歳の平成18年5月、同窓会当番幹事として再び母校に戻ってきました。

卒業以来、32年ぶりに再会した仲間にも巡り会うことができ、それまであまり交流のなかった人も、そこは本当の同級生、時間は一気にあの頃に戻り、みんながお互いに協力し、無事に当番幹事の大役を果たすことができました。歌のフレーズではありませんが、「この町を歩けば、蘇る16才、懐かしいその声・・・」でした。

あれから4年、毎年の同窓会終了後、あいかわらず「よんく会」を開催し、変わらぬ友情を暖めあっています。同級生のみなさん、また来年「もう一杯どう?」。よんく会で会いましょう。

結びに、創立130周年を迎えた母校のさらなる発展と、先輩各位をはじめとする皆様方の御健勝をお祈りします。

昭和49年卒：「よんく会」

天地化育
昭和57年卒業生

昭和57年卒

在校時、百周年を迎えた私たちの学年も、中年から早や老境入り。２０１４年には、当番幹事の当たり年となる。現在、「どうせやるなら、楽しく集う」をモットーに仲間を集めはじめている。

さて、この30年、もっともっと変化するはずと思われた世界情勢だが、人間のファンダメンタルな所業は、さほど変化していない。企業は、対前年比に一喜一憂。学校も相変わらず偏差値に踊らされている。単純な勝ち負けの構図は、日々の生活に潤いを与えるが、それに終始したら、生き物としての原点である「多様さ」を見失う。馬鹿であっても利口であってもいい。起業しても倒産させてもいい。暴騰・暴落、大いに結構。世界を測るスケールは多種多様だし、いろんな人間が住む島こそ、この国であるのだから。そして、その基盤に、あの「天地化育」がある。多様な者たちが一つの天体に住むという、人為を超えたあの教えだ。

日常の近視眼的生活に、本当の潤いを与えてくれる、母校が教えてくれた教えである。

吉澤　直人

甲府第一高等学校創立130周年記念誌別冊
甲府中学校・甲府第一高等学校
「我ら、同級生」

発 行 日　2011年3月10日

発　　行　山梨県立甲府第一高等学校
創立130周年記念誌編集委員会
山梨県甲府市美咲2丁目13-44

印　　刷　株式会社少國民社